

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兇狐 Kanekiru Kōketsuno
5

目次

本編
7

番外編
五鬼戦隊。パラベランジャー／第五殲鬼・公爵令嬢救出すッ
229

モンスター大図録
Vol.4
(ゴブ爺〈故〉&赤髪ショート監修)
261

ミノ吉

ミノタウロス

牛頭鬼・新種となったアボ朗の親友。
超重量級の身体と武具により、
圧倒的な実力を誇る。

ダム美改め
カナ美

アボ朗と共に生まれ育った
仲間にして正妻。
現在の種族は吸血貴族・
亜種。

アス江

地と雷を操る巨体の
アースロード
地雷鬼・亜種。
ミノ吉の恋人でもある。

女武者

アボ朗同様、別世界からの
来訪者である【異邦人】。
意外な才能でアボ朗を
助ける。

女騎士

シュテルンベルト王国出身
の気丈な女性貴族。
自身を打ち負かした
アボ朗に身も心も捧げ、
妻の一人になった。

赤髪ショート

赤髪カトレードマークの
元冒険者。今はアボ朗の
仲間兼妻の一人として、
冒険を手助けする。

アボ朗

ゴブリンに転生した主人公。
【吸喰能力】によって、
喰えば喰うほど強くなる。
現在は使徒鬼・絶滅種に
【存在進化】している。

《百八十六日目》

まだ朝日も昇らぬ時間。俺ことアポ朗は飛行型外骨格【翡翠鷲王の飛翼】を身に纏い、お転婆姫の依頼で来ていたシュテルンベルト王国の王都から単鬼で飛び立った。

最近特に冷え込む時期になってきていたので高速飛行はどうかと思っていたが、外骨格の防寒性はある以上には優れており、分厚い凍雲の中に突っ込んでも全く寒くはなかった。

流石に外骨格の表面は薄く凍りついてはいたが、身震いすれば楽に剥がれる程度なので問題は特に無い。気にも留めずに、全速力で飛び続けた。

途中で飛行型モンスターと何度かすれ違ったが、その際に生じた烈風で簡単に吹き飛んでいたの、高レベルのモンスターではなかったらしい。

今は急ぎなので狩りはしなかったが、帰りに遭遇したら摘み食いしようと思う。どんな味がするのだろうか、少し楽しみだ。

目的地は、生まれ故郷の《クーデルン大森林》にある拠点である。

帰還理由は、昨日逝いつてしまったゴブ爺おやとの別れを済はます事だ。

ゴブ爺が死んでからまだ数時間しか経っていない。訃報を聞いた時刻が遅かったので昨日はさっさと寝てしまったが、普段よりも早く起きて帰還した為、朝日が昇り、拠点に残っていた我が傭兵団《戦に備えよ》の団員達が本格的に活動し始めた頃には到着する事ができた。

残留組は、戦闘能力が低かったり、そもそも非戦闘員だったり、温泉施設などでの仕事があったりする猫妖精やコボルド、ドワーフや人間の女性が主だ。

誰にも帰ると伝えていなかったたので顔を見せると驚かれたが、すぐに『アポ朗なら不思議ではない』と全員が納得していた。

まだ仲間入りして間もない者も多いのだが、皆ここで過ごす間に今まで持っていた“常識”が徐々に崩れ、すっかりこの“常識”に馴染んだので、こんな薄い反応となったようだ。

馴染む事によつて他種族間でも仲間意識が生まれたり、恋愛感情を抱いたりするので都合は良いのだが、初期の新鮮な反応が見られなくなるのはちょっと寂しくもある。

ともかく、そんな団員達とすれ違う度に簡単な挨拶を交わしつつ、俺はゴブ爺が居る部屋に急

いだ。

ゴブ爺の遺体は霊安室に安置されている。霊安室といっても、居住区を改造する内に不便だから、という理由で外したかつての坑道の奥深い場所だ。

ひんやりと肌寒いそこは、蟲などもあらかた駆除しているので、短時間なら死体の保管もできる。それなりに広いので天然の食料保管庫としても使えるが、それは一先ず置いといて。

コブ爺は、平たい石に敷かれた毛皮の上に寝かされていた。

着ているのは普段通りに腰布一枚で、傍に愛用の杖がある。

外傷が無いのでパツと見では眠っているだけのようだが、見間違ひようも無く死んでいる。まだ腐臭こそ漂っていないが、冷たくなった身体は二度と動きはしない。

アンデッドとなつて動き出す、なんて事も無さそうだ。

まあ、アンデッドになつても弱いだらうけどな。

色々と確認した後暫く合掌し、黙祷。

南無。ゴブ爺の冥福を祈る。

改めて遺体を見ると、僅かながら寂しさを感じた。

涙を流したりはしないが、これからの鬼生でゴブ爺に対して感謝の気持ちが消える事は無いだろう。

ゴブ爺がいなければ、この世界の情報を得るのにかなり手間取っていたのは間違いない。大森林で採れる素材の使い方など、赤髪ショート達からは得られないような情報はかなり多かった。本当に、ゴブ爺には助けられたモノだ。

……と感謝した後、俺はゴブ爺の身体を丸々喰ってみた。己の肉体を操作して口を限界以上にまで広げ、三口で全身を喰い終える。

正直な話、ゴブ爺は美味しくない。痩せているので肉は少ないし、骨もボロボロで軽く噛んだだけで呆気なく砕け、喰い応えもない。それに死後数時間は経過している上、二十年以上生きた小鬼^{ゴブリン}なので、新鮮とも言い難い^{にく}。

それでも俺は血の一滴も残さずゴブ爺を喰い、その全てを自分の血肉とした。そうする事が、正しいと思ったからだ。

【能力名^{アビリティ}】老鬼^{ろうき}の知恵袋^{ちえぶくろ}】のラーニング完了^{完了}】

……正直、ラーニングできるとは思っても居なかった。

ラーニングには、相手がある程度強い事が条件であるが、ゴブ爺は弱過ぎるし、俺^{アボストルロード}が使徒鬼に【存在進化^{ラングアップ}】してから必要になった摂取量にも全く足りていないからだ。

だが、実際にできてしまっている。

もしかすると、ゴブ爺は相当に知恵を蓄えていたかもしれない。かなりの確率であり得ないとは思うのだが、その可能性は捨てきれない。

俺がかつてゴブリンだった事で、そもそもラーニングし易い下地が既に出来ていたのか、あるいはゴブ爺には少なからず思い入れがあったから故か、そのあたりがラーニング成功率を引き上げていたのかもしれない。

ともかく、ラーニングできた原因については考えない事にする。

そもそも確率が変動するモノであり、ラーニングできたモノはラーニングできたモノなのだから考えても仕方ない。

取りあえず、早速【老鬼の知恵袋】を使ってみる。

だが何も変化はない。俺の視界には、ただ岩肌^{いわだ}が剥き出しの洞窟^{ほら}が広がっているだけだ。

不発、という訳ではない。アビリティは確かに発動している。

今度はアイテムボックスから【弾けの実】を取り出してみた。

すると【弾けの実】を指すような逆三角形の幻影が見えた。以前は無かったので、【老鬼の知恵袋】の効果によるもので間違いない。さしあたって、それに触れるように念じてみた。

名称…弾けの実

分布…クーデルン大森林全域、イスカリアン牢樹海、など他多数。

特性…一定以上の衝撃を与えると硬い種を周囲に撒き散らす。種は三〜八个とバラつきがあり、数が多い程、種は小さく、また硬くなりやすい。

備考…食用に適しているのは種のみである。種もそのままだと硬過ぎて喰えたモノではないが、数時間じつくり煮ると柔らかくなる。食感は豚肉に近く、濃厚な味わいがある。

蘊蓄…弾けて種を散布する際、低確率ながら、飛び散った種に当たって死んだ小動物の死体を養分とする場合がある。

そうなると通常よりも成長が早くなり、種の硬度、弾ける強さなどが上昇する。

世界最強の弾けの実——その段階になると【滅爆の実】と呼ばれる——は、世界に五つし

かない【大神級】の【神代ダンジョン】を内包する「オルトリア死滅樹海」にて確認されている。

至近距離なら竜・龍の竜鱗や龍殻すら突破するらしく、ダンジョンに挑む者はまずその対策を講じる必要があると言われている。

更なる情報を閲覧しますか？

《YES》 《NO》

その後も幾つかのアイテムに試して分かったのだが、【老鬼の知恵袋】は大森林や樹海などで採れる素材の特徴や特性、モノによってはそれを使った毒薬の製法などを、今まで知らなかった知識も含めて脳内に表示するという効果があるらしい。

どうやら【物品鑑定】などと同じ系統のアビリティらしいが、コチラの方が蘊蓄なども見えるので、より詳しい内容だ。

情報を読めない対象が多いのが欠点だが、蘊蓄は今後の為になるし……ちょっとだけ、【弾けの

実】を本格的に育成しようかと思ったのは秘密である。

なんだよ、【滅爆の実】って。かなりヤバそうで、面白そうじゃないか。

ま、まあ、得られた知識の中には色々と応用が利きそうなモノもあったので、錬金術師さんとかと一緒に新薬の開発をする際、意外と発想の役に立ってくれるのでは、と期待しておく。

死んでも何かと手助けしてくれそうなゴブ爺に向けて、再度合掌した。

ゴブ爺との別れを済ませて霊安室から引き返し、いい匂いがあるので大食堂の方に行くと、厨房には朝食を作っている姉妹さん達がいた。

姉妹さんにはまだ顔を見せていなかったもので、王都に行っているはずの俺が居る事にビックリされたが、すぐに笑顔を見せてくれた。ほっこりと和む。

二人の笑顔を見ると、王都にとんぼ帰りするのもなんだか、と思い、姉妹さん達の手料理を久しぶりに堪能する事にした。

朝飯もまだだったので丁度いい。

匂いに誘われるくらいには腹も空いている。ゴブ爺では腹の一分も満たなかった。

という訳で、かなり多くなった団員数に見合うだけの広さを誇る大食堂の座席の一つに座り、料

理に励む二人の様子を観察する。

食堂の増築に伴い、厨房も徐々に拡張された結果、こちらも相応の広さとなっている。余裕で十数人が一度に調理できるくらいだ。

厨房に設置されたコンロや水道といった設備、包丁や鍋などの調理道具は、鍛冶師さん達が魔法金属や精霊石を使って製造しているので、かなり充実している。

自慢ではないが、お転婆姫の《琥珀宮》の厨房と同等かそれ以上の設備となっていた。

そんな厨房で姉妹さんは大鍋に刻んだ大量の食材を放り込み、火精石が仕込まれたコンロで煮込み、調味料で味付けして、と淀みなく動き回り、朝食を着々と作り上げていく。

姉妹さん以外に料理を作っている者はいないが、【職業・料理長】を得た姉妹さんだけでも、数十名の残留組の飯を賄うのに十分である。

いざとなれば別の所で働いている料理担当が手助けするが、姉妹さんは楽しそうに作っているから無用な心配だろう。

姉妹さん達の働きっぷりを見ながら料理を待っていると、やはり久しぶりに顔を合わせる鍛冶師さんと錬金術師さんがやって来た。

姉妹さんと同じように俺を見て驚いた彼女達だったが、こちらもすぐに元に戻り、一緒に他愛も

ない話を楽しむ。

短いながらもイヤーカフスを介して毎日話していたとはいえ、直接会って話す方がいいに決まっている。微妙に変化する表情や肉体の温もりは、通信では伝わり難いからな。

そしてついに完成した姉妹さん達の料理は期待通りに美味しく、栄養満点で、一日の活力が内側から漲った。

そんな料理もさることながら、今一番注目すべきは、錬金術師さんの腕に抱かれてスヤスヤと眠っている、俺の子の中で唯一の人間——ニコラの存在だ。

正直、可愛くて堪らない。ぷにぷにとした赤い頬つぺた、幸せそうな寝顔、俺の指を握る小さな五指、触れれば壊れそうな程柔い身体。

長女オーロや長男アルジェント、次男鬼若も勿論可愛いのだが、一番下の子で、まだ赤ん坊であるニコラは特に可愛過ぎて困る。四人には等しく愛情を注いでいるつもりだが、うむ、見ていてついニヤけてしまうのも仕方ないと思う程だ。

ニコラはまだ言葉を喋れないが、時折まるでコチラを観察しているような目をする事がある。

俺の血を引いているのだから、案外すぐ動き回り出したりとか、普通に喋り出すかもしれない。流石に親馬鹿過ぎかとは思うが、そう思わせる何かがあるのも確かだ。

ふと気になったので、かつて手に入れた英雄ベルベットの遺産の一つである【遺物】級のマジックアイテムで調べてみると、なんとニコラは生まれた時から【職業・鬼児】【職業・紋章術師】という二つの職業を持っている事が判明した。

【鬼児】は父親の俺が鬼だから得られたのだろう。オーロとアルジェントも同じく持っていた。

この【職業】の特性は、普通よりも強い生命力の獲得、成長力の促進、などが挙げられる。

錬金術師さんが授乳させる時ちよつと痛い、と言っていたので、力も上がっているのかもしれない。

【紋章術師】というのは、雪山のボスモンスターだったバロールが行使していたような紋章術を使う【魔法職】の一種だ。

俺のと似ているが微妙に異なる刺青を、他の三人の子と同様ニコラも持っているの、それが関係しているのではないだろうか。

ただそうするとオーロとアルジェントが【紋章術師】を持っていない事が気になるが、きっとそこら辺は個人の素質や才能が関係しているのに違いない。

あるいは別の条件が隠されているのかも。

久しぶりに会った五人に癒されている内に、今日は拠点で一泊する事に決めた。

ほったらかしにしていた負い目があるし、せっかく帰って来たのだからサービスせねば。
そんな訳で。

朝食を喰い終わると、レプラコーン達が防具などを織り、ドワーフ達がせっせと武器を鍛造している《工房》にて、鍛冶師さんや錬金術師さんと一緒にあれこれした。

どうやら二人は、というか二人を加えたドワーフ達は最近、新素材開発に凝っているらしい。少しでも良い合金を造ろうと、日々夜遅くまで研究しているという。

以前ポロっと、錆び難いステンレス鋼や、色々と使い道のあるマグネシウム合金、モーターの鉄心用磁性材料などに使えるケイ素鋼などの話をしていたのだが、それに興味を刺激されたそうだ。

幸い材料は拠点の拡張工事の為の掘削の際に確保できていて、一度王都に行った時にも大量に買い込んでいた。最近では近くの山に遠征して新たな鉱石類を採掘しているそうなので、研究する分くらいなら何とかなっている。

合金を造るには様々な金属があった方がいいだろう。そう思った俺は、お土産として買っておいれた多種多量の金属類を渡しておいた。

非常に喜んでもらったので、何よりだ。

今の時点でも、ドワーフ達の手助けと、【魔法金属】や【魔法薬】などを使用した独特の製法によって、面白い特性を持つ新しい合金の開発に成功しているらしい。

鍛冶師さんと錬金術師さんが揃って胸を張り、ドヤ顔をしていたのが印象深い。

鍛冶師さんとはともかく、クールな錬金術師さんもそんな事をするとは、普段とのギャップがあった、ぐっと来る。

まあ、失敗の方が圧倒的に多かったようだが、失敗は成功のもとである。

そこから新しい物を造れたのだから、消費した材料分の価値はあった。

ただし、まだ発表できる程の品ではなく、納得がいく完成度になったら報告してくれるらしい。
楽しみだ。

やる気になっているので、どんな合金なのか調べるのは自重しておこう。

そんなやり取りを午後まで続けた後、今度は姉妹さん達と一緒に昼飯の調理に取り掛かる。

王都や迷宮都市から大森林では採れない食材を持ってきたので、それを使う事になった。

作ったのはジャダルワイバーンの肉を使用したハンバーグや焼き亜竜肉などだ。出来上がった料理は、朝の仕事を終えて昼飯を喰いに集まった団員全員がお代わりをするくらい好評だった。

食事を終えた後、残留組全員に今日の料理の話について緘口令かんこうれいを敷く。

喰えなかった奴等が嫉妬してしまうからだ。それに加えて、些細ながらも秘密を共有する事で結束を強める、という狙いもほんの僅かにある。

他の奴等にもいずれ食べさせてやるつもりではあるが、もう少し後になるだろう。

昼飯の時間が過ぎると、ドリアーヌさんが活躍している《温泉施設》の方に赴いた。

エルフ達に開放している《温泉施設》には、外からやって来た者——一部の極めて少ない例外を除いてエルフだけが——に分かりやすいように《パラベラ温泉郷》という別名を付けている。

団員用の温泉から距離を置いて造られたそこは、最初は周囲を囲う壁と和風の屋敷だけしかなかったのだが、時が経つにつれて自然と周辺設備が増え、立派になっている。

ドワーフ達がミスラルなどを材料にして造った武具や、繊細な細工が施された装飾品を売る金物屋《ドワーフ装具・グラスハンマー》。

手頃な値段で喰えるだけでなく、食材を持ち込めば格段に安く多彩な料理を提供してくれる料理店《注文が増える招き猫》。

開拓が進み広さを増している《農地》にて、精霊石を使用して造られた新鮮かつ栄養たっぷりの野菜や果実を安く売る、エルフの奥様方に大人気の八百屋《森精の恵み》。

ハマり過ぎに注意ですよ、と警告しつつも夜遅くまでヒトの欲望をかき集める賭博場《カジノ・バカラ》。

金が無くて賭博ができなくなった者、あるいは金を返せなくなった者達を誰かれ問わず吸い尽く

す金貸屋《借金地獄》。

遅くなったからちよつと一泊していこうかな、汗流したいし、という客層を狙った平屋の簡易的な宿屋《温泉宿・タイラ》。

高額で完全予約制ながら、便利なマジックアイテムをふんだんに使用した部屋に泊まる事ができ、温泉への移動が非常に便利かつ様々なサービスを受けられる《温泉屋敷・鬼の釜》^{かま}。

こんな具合だ。

正直、温泉だけやっていても十分な成果を得られたとは思う。

だがこうして色々な商売に手を出すのは、決して悪い事ではない。

傭兵業だけでは、あつと言う間に千にまで増え、これからも増えるだろう団員を養うのはちよつと大変だ。

《農地》で野菜などは作っているし、【下位巨人生成】のアビリティがあるのでその肉を加工する事で食費はかなり抑えられているのだが、いつ何が起きて食材が不足するか分からない。

万が一その時が来たら、大量の食材を買うにも、団員の装備を買い揃えるにも、作るにしても、相応の大金が要る。

だからこうして定期収入が見込める活動基盤を固めつつ、手広く金稼ぎする手段の確立は必須だった。

その為に色んな商売を経験するのは丁度良かった、という訳だ。

最初は不安な部分もあったのだが、実際やってみると狙い通りにエルフ達の生活の奥深くまで喰い込めたので、一先ず成功と言えるだろう。

肩の荷をかなり下ろせた気分だ。

今後ともエルフ達とはいい隣人であり続けたい。立場的にコチラが優位なままなら尚良しだ。

そんな事を思いつつ、《パラベラ温泉郷》を回って気になる点を改善させ、最後にドリアーヌさんによる天然由来のアロマオイルを使用したオイルマッサージを受けた。

これをやろうと考案したのも、手技を教えたのも俺なので、マッサージを受けながらどこが悪いか、どこが良いかを指摘していく。

日頃の疲れが取れるようで、まったく癒されました。

やっぱりマッサージは良いもんだ。

そして夕方、久しぶりにエルフ達の代表の一人である父親エルフと酒を飲む。

今回は特別に、幹部専用の温泉に招待する。温泉に入りながら飲むエルフ酒の味はひと際美味しく感じられた。岩壁をくりぬいて外の風景が見られる一角で、夜空に輝く星の輝きを見ながらだと、より一層味わい深くなる。

やはり飲み友達が居ると良いもんだ、と思っていると、父親エルフの弟の話になった。

弟エルフは以前父親エルフが酒樽十個と引き換えにして俺から得た、外のエルフを特別に《パラベラ温泉郷》に招く権利を使った相手だ。

彼は父親エルフと共に数日間《パラベラ温泉郷》に滞在し、店舗などを色々と興味深そうに見ていたが、中でも様々な種類の温泉を堪能していた時間が最も長かったという。

長年の疲れが徐々に取れていったようで、帰る頃には来た時よりも元氣になり、すっかり温泉にハマっていらしたらしい。

その時に弟エルフの強い要望で、通信可能な鉄製の名刺“名鉄”を父親エルフから一枚渡しているのだ、それを介して実際に言葉を交わしている。

まだ直接会っていないが、名鉄に埋め込んだ俺の分体経由で、姿形その他の情報は把握済みだ。流石兄弟と言うべきか、弟エルフは父親エルフと似たダンディなオジサマだ。同性ながら、どうせならあんな年寄りになりたい、と思うような気品がある。

しかも老舗商会《緑矢星郷》会長という大層な身分も持っているのだ、ぜひとも懇意にしたい人物でもある。

まあ、コチラには温泉という鬼札があるので、仲良くなるのは簡単だろう。

温泉を対価にチラつかせるとアチラはかなり乗り気になっていたのだ、間違いない。

俺としても色々な情報を集めた結果、この温泉がどれ程貴重なのか分かっているので安売りするつもりはないが、対価としては十分だ。

弟エルフはかなり行動力があるようで、現在は王都に向かっているらしく、到着したら色々と本格的な商談をしよう、と約束を交わしている。

父親エルフも『弟とも仲良くやってくれ』と言っているので、長く付き合えるよう対等な関係を結びたいものだ。

そうこうするうちにすっかり夜も遅くなり過ぎたので、父親エルフを《温泉屋敷・鬼の釜》に泊まらせ、細々とした手続きを済ます。

今日は夜のお楽しみが待っているので、さっさと片付けました。

《百八十七日目》

昨夜は大いに三大欲求の一つを満たし、今日は清々しい朝を迎えた。

各地に散らばらせていた団員達は、行った先々でそれぞれ依頼を任されているらしい。

依頼内容は、都市の防衛、領内の視察に赴く貴族の護衛、近くの山に住み着いてしまった盗賊団の討伐、暴れるモンスターの討伐、など多岐にわたっている。

これまでの依頼人は基本にお転婆姫だけだったのに、こうして一気に大勢の依頼人が出現したのは、どうやら我が傭兵団の名がかなり広がってきた事が原因らしい。

先のクーデターの影響で少なからず乱れた治安の隙を狙い、盗賊山賊の類が暴れるのではないかと村長やら領主が悩んでいる所に、団員達が登場。それを知って即依頼——という流れが依頼の約半分を占める。

依頼を受けてそれを完遂すれば徐々に信頼を得られるし、切羽詰まった所程、割高な報酬金を提示してくれているので、断る理由はほぼ無い。

細々とした予定を調整し、依頼を受けさせつつ、今後の展開で必要になった奴等を、王都の屋敷や迷宮都市《パーガトリ》に結集させる事にした。

せっかくの休暇が早く終わってしまった者も居るが、今は我慢してもらおう。本格的な始動にはもう少し準備が必要だから、多少は優遇するつもりだ。

朝のうちに指示を済ませ、朝食を終わらせてから王都に帰還する。

鍛冶師さん達に見送られ、空の旅を楽しむ事しばし。途中で何匹か飛行型モンスターを摘み食いしてみたが、ラーニングはできなかった。ラーニングするには、やはり腰を据えて大量に狩らねばならないようだ。

ある程度食べたところで狩りは止めて、先を急いだ。

やがて王都《オウスヴェル》が見えてきたので地上に降り、【王認手形】を使って中に入る。

城下街はクーデターの間少なくなっていた人口が回復したらしく、以前と同じかそれ以上の活気に満ちていた。道を多くのヒトが行き交い、客を呼ぶ声が響いている。

やはり王都はこうでないと、と思いながら、お転婆姫から報酬として貰った、城下街と貴族街の境にある屋敷に向かう。

道中にある露店や店で品揃えや価格のチェックをしながら歩いていると、ヒソヒソと囁かれ、指差される事が次第に増えていった。

優れた聴覚によって大凡の内容は聞こえているが、加えて【盗聴】を使って雑音を消し、クリアな声を聞いてみた。

それによるとどうやら『ほら、あれが例の切り札って話の』『闘技場でジャダルワイバーンを瞬殺した実力は本物だからな、俺は凄いい奴だと最初から見抜いていたさ』『はあはあ。ヤバイ、本物、本物の、本物のッ！ ブハッ!!』などと言われているらしい。

大半は成り行きで参加した闘技場での一戦だったり、クーデターの時にお転婆姫の陣営で活躍した件について囁いているようだが、一部にはあの第一王妃や閹勇と似た雰囲気のお若男女が居る。恐らく、俺に加護を与えた（事になっている）神を信奉する者達だろう。

そうした者のほとんどは、まるで神に祈るような仕草をしているのだが、それはまだいい方だ。

第一王妃のように恍惚の笑みを浮かべ、紅潮した頬と血走った眼で俺を見つめる者がそれなりに交じっているのは問題だろう。

束ねられた熱い視線は物理的な力を持ちそうな程で、流石に寒気が走り、ブルリと身体が震えた。戦闘ならば間違いない瞬殺できるが、街中でただ見つめてくるだけの相手には何もできないのである意味かなり厄介だ。

狂信者、本当に恐い。俺にとっては盗賊や軍隊よりも遥かに相性が悪い存在とも言える。ストレスで肩が凝りそうだ。

何だか気分が削がれたので、露店で焼き鳥を束で買った後は、足早に屋敷に向かう。

背後に多数のストーカー達の気配がしたので、建物の屋根を跳びながら進む事にした。それに反応できるモノは居らず、何か名残惜しそうな溜息が聞こえたが、黙殺。

気にすればする程滅入りそうだ。

そうしてやっと城下街と貴族街の境にある屋敷に到着すると、待ち構えていたカナ美ちゃんに迎えられ、抱き締められる。

大森林への一時帰宅に置いて行かれた事が納得できていないらしく、俺の胸に顔を埋めて愚痴り

ながら、一見か細い両腕で、しかし重機のような力で絞めつけてくる。

俺が相手でなければ、骨は折れ、内臓は口から溢れ出し、最終的に胴体を真つ二つにされていたかもしれない。

いや、『かも』ではないか。確実にそうなるだろう。そう確信できるぐらいの力が込められている。岩程度なら簡単に砕けそうだ。

ちよつと気が動転しているとはいえ、流石にこれは直すべき癖なので^{たしな}奢める。カナ美ちゃんはしばらく子供のように頭を左右に振って拒否していたが、頭を撫でてやると徐々に力が抜けていった。最終的に解放された時にほつと溜息が出たのも、仕方ない事だろう。

そんなカナ美ちゃんの後ろには、苦笑を浮かべる赤髪ショートや、羨ましそうにカナ美ちゃんを見ていたオーロとアルジェントの姿もあった。それぞれが笑みを浮かべて『お帰りなさい』と言ってくる。

ちよつと気恥ずかしいが、『ただいま』と返しておいた。

さて、帰ってきて早速だが、屋敷の改装を始める事にした。

店舗として使っていた一角の拡張と、客室一階部分の店舗化の二点が今回の主目的だ。

元々店舗の部分はそのままで弄る部分が無い。余分な壁を壊して広げ、内装を整えるだけで済む。

問題は客室の方だ。

ここでは《パラベラ温泉郷》でノウハウを積んだオイルマッサージの提供と、カナ美ちゃんを筆頭とする女子陣がデザインし、レプラコーン達がつ作った衣服の売買などをしようと思っている。

まだやるかどうかは未定だが、個人的に岩盤浴なども王都の貴族に人気が出るだろうと思うので、それ等も考慮した造りにするつもりだ。

既に大雑把にはどうするか決めているので、後は作業しながら微調整していけばいい。

王都でも腕利きと名高い職人達を、お転婆姫とのコネで結構な数を雇っているので、短期間で完成するだろう。

が、より作業期間を短くする為、手先の器用な団員も大量に動員する。

人手を増やしつつ作業訓練にもなるので一石二鳥だ。いや、経費削減にもなるので一石三鳥と言えるだろうか。

屋敷の一階はともかく、店舗の方の改造は数日もあれば完成するだろう。

屋過ぎ、店に並ぶ商品の飾り方を考えながら、工事現場でせつせと木材を加工する俺が居た。

【^{クラフツマン}細工師】やこの間得た【造形の亜神の加護】があるので、見よう見真似でも意外とそれなりの物を造る事ができる。周囲にはプロ中のプロが揃っているの、ただ見るだけでも勉強になるし。

みるみるうちに目に見えて上達していくので気分が乗り、色々な品をかなりの速度で造っていく。するとそれを見ていた親方——職人を束ねる五十代男性——に気に入られたらしく、普通は弟子にしか伝えないような技術を、短時間ではあるが教えてもらえた。

ぶっくら棒な所もあるが、親方の教え方は的確で分かりやすく、アビリティの効果もあって、最終的にはその技術を何とか模倣する事ができた。

教え通りの品が出来上がると、親方はそれを見て、どこか満足そうに頷いていた。

親方は気難しい性格なので、直弟子でも滅多にこんな事はしないという。教わる俺と教える親方を見て、驚愕の表情を張りつけた三十代の弟子が、そっとそう教えてくれた。

親方からありがたく技術を吸収し、その礼として、仕事が終わった夜にはエルフ酒を振る舞った。ついでに交流会も兼ねてそれなりに広い庭で宴会を催し、屋敷で働いている執事やメイド達もそれに参加させる。

宴会で出す料理を作るのは、主に俺が担当。野外での宴会なので、ブラックフォモールの肉や《農地》の野菜を使用したバーベキューが適当と見た。

大森林で採れる木材で作った炭を燃やし、巨大な金網の上でそれ等を大量に焼く。鉄板を用意して作った焼きそばも好評だった。

一つ一つかなりのボリュームがあったので、全員分の料理を用意するのもそこまで手間ではなかった。

とはいえ数が数なので、料理好きなオーロが隣で手伝いをしてくれた。

親子の共同作業はええもんだし、参加者がガツガツと夢中で喰っている姿は、作った身としてはやりがいがある。

交流会は、成功したと言えるだろう。

《百八十八日目》

久しぶりに、朝から年少実験部隊《ソルチュード》の訓練を指揮する。

この二日程赤髪ショートに任せていたのだが、彼女の戦い方を真似たのか、子供達の動きがどことなく獣のような感じになっている。戦技よりも体術を使う頻度が高く、徐々に《戦に備えよ》の団員らしくなってきたと言えるだろう。

まだまだ使い物にはならないが、若いので日々の成長も早い。纏め役のガキ大将や年長組は特に元氣がある。

食欲に強くなろうという意思もあるので、今後に期待だ。

朝の訓練を終えると、昼から職人達に交じり、屋敷の店舗改装の手伝いをする。

作業も二日目なので、何となく要領の分かってきた他の団員達の運搬作業も早くなっているようだ。

昨日よりも効率良く作業は続き、店舗の方がかなり進んだところで夕暮れを迎え、今日の仕事は終了となった。

流石腕利きの職人、作業スピード凄いな、と親方達を称えて、迷宮で採れた酒を出し、互いを労う。

やっぱり労働の後の酒は良いもんだ。

だが、今日の宴は早めにお開きにしておく。

明日は作業を早くから行う為だ。

《百八十九日目》

深夜、俺の次男である鬼若を連れて旅をしているミノ吉くん達一行が、何者かに襲撃された。

とはいっても、コチラに被害は出ていない。

それに対して、襲撃者は全滅していた。

簡単に流れを説明するところである。

まず、愛獣^{ペット}を枕に熟睡していたミノ吉くんが、近づいてくる集団の気配を察知して覚醒。

起きたと敵に覺られないように聴覚と嗅覚だけで周囲の状況を大雑把に調べると、全方位から僅かな衣擦れの音が聞こえ、数十人分の体臭が嗅ぎ取れた。

イヤーカーフスに寄生している分体の索敵によって「三十三」という正確な人数が出たのと、敵がゆつくりと近づいてきたのは、殆ど同時だった。

ミノ吉くん以外は、骨格を組み替えてテント型になっていた骸骨百足の中で休んでいたが、アス江ちゃんをはじめとする実力者は近づく集団に気が付いていた。

対策を講じる為にイヤーカーフスで連絡を取り合い、本人の希望によって、ミノ吉くんだけが出撃する事が決定。寝ていた場所が一人だけ外だったのも都合が良かった。

そして敵が状態異常【麻痺】【昏睡】を引き起こす特製の煙玉を骸骨百足付近に投擲^{とうてき}する直前、飛び起きたミノ吉くんが逃げる間も与えずに蹂躪^{じゆうりく}を開始した。

戦闘開始から終わりまで、多分十数秒も経過していなかっただろう。斧の一振りで数名を纏めて斬り殺し、大地を舐めるように広がった雷炎で更に殺す。

最近ますます力を付けてきたミノ吉くんは、頼もしい限りである。

本音を言えば捕虜の一人でも確保してほしいところだが、ミノ吉くんだから仕方ない。身体はと

もなく、頭の方は昔と変わらずあまりよろしくないのだから。

何とか原形を留めていた数少ない敵の死体を検分した結果、やはりと言うべきか、所属を示すような品は一つも発見できなかった。

種族は獣人だったり人間だったりと統一性は無いが、全員同じ規格の使い込まれた装備だったので、寄せ集めの傭兵、という訳ではないだろう。

麻痺毒を塗布した剣と致死性の猛毒を塗布した短剣、非合法な多数の薬品、全身各所に設置された猛毒塗布済みの暗器、高い【隠れ身】^{ハイドイング}効果を持つ頑丈な革のロングコートにズボン、足音がしないマジックアイテムのブーツなど、まるつきり暗殺者の装いだ。

状況的に王国は除外するとして、どこかの国の機関員である事は間違いない。

襲われた理由だが、恐らく王国での戦いが原因だろう。

俺達《戦に備えよ》^{ベラム}が保有する戦力は質と量共に優れているので、他国から危険視されるだろうなどは前から思っていたし、分体で集めた情報からこれが事実だと分かっている。

一部には即排除、などと言っている所もある。どことは言わないが、そういう所もあるのだ。

団長である俺は王都に居るから手を出せないとして——王都の間者の掃除が粗方終わっているの

で、物理的に手段が無い——主力級であるミノ吉くんやアス江ちゃん達の部隊を早い段階で消したかったのだろう。

もしくは威力偵察のつもりで、ある程度かき乱したら逃げるつもりだった可能性もある。

全滅させてしまっているのだから本当の所は分からないが、一応全部隊に警戒するように伝えた。

新しい戦いの予兆に、ちょっとワクワクし始めた俺がいる。

《百九十日目》

今朝早く、弟エルフが王都に到着し、俺の屋敷にやって来た。

エルフ酒と迷宮産の高級酒を数種、その他に希少な魔法金属やら鉱石やらを手土産に、である。

父親エルフから、俺が酒好きだと聞いていたのだろう。流石は老舗商会の会長だ、かなり用意が

いい。

屋敷の接待室に通し、商売の話をする。

弟エルフの隣にはやり手そうな青年——弟エルフの息子——が、俺の隣には見る者を魅了して

やまない美貌を持つカナ美ちゃん^{ミナミ}が居る。

カナ美ちゃんに見惚れて息子エルフが上の空だったのには、弟エルフと共に苦笑してしまった。

交渉の結果、結構な数の契約を交わす事になった。

アチラは俺達の商会——総合商会《戦に備えよ》に土地や商売の利権などを色々と援助し、コチラはその見返りに、温泉の使用権や大森林の素材などを融通する、といった内容だ。

ぶっちゃけ温泉だけでイケたと思う。

弟エルフは隠そうとしていたが、新しい温泉の考案をチラツと洩らすとかなり喰いついてきたからだ。まるで温泉中毒者だ。

いや、温泉は本当に気持ちいいからその反応も分かるけど、そこまで分かりやすく反応されると、対価はこれだけで十分なんじゃないの？　と思わなくもない。

まあ、この世界は天然温泉が少ないし、あってもただ入るだけという所が多い。《パラベラ温泉郷》のように電気や泡など多種多様な湯は珍しいし、水質も一級品だからな。

弟エルフが温泉だけで何にでも領こうとしたのを息子エルフが止めていたが、そのやり取りもまた人柄を知る情報になる。短い時間の出来事ではあるが、二人の性格を大雑把に理解できた。

少なくとも、契約書の内容は特別な事情でも無い限り守られるだろう。裏切ったら裏切ったで、相応の報いは用意するつもりだが。

当面は良い関係が続けられそうだ。

商談が無事終了したので、屋敷の改装に取り掛かる。

その様子を弟エルフ達が見学したそうだったので、カナ美ちゃんに二人の接待を任せる。

その後も問題は無く、一日が終了した。

《百九十一日目》

今日は特に語る事はない。

黙々と改築を進め、店舗部分の工事はほぼ終わりが見えた。

このペースなら、明日には完成するだろう。一階部分はより広い分だけ、まだまだかかるが、商品の陳列を済ませば営業はできるはずだ。

《百九十二日目》

朝から始めた店舗の工事は、昼過ぎには完了した。

ここで行うのは、簡単に言えば総合スーパード。

店舗は縦五〇メートル、横四〇メートル、高さ七メートル程のゆったりとした建造物で、多くの商品を並べる事ができる。

大森林で採れる植物やブラックスケルトンの黒骨といった、錬金術などに使用する様々な素材。

切れ味が鋭く錆び難い包丁や、軽くて丈夫な大鍋など、家庭用の調理器具。

空輸で持ってこさせる《農地》産の瑞々しい野菜や、ブラックフォモールの肉など多種多様な食材。

ドワーフやレプラコーン達が手掛けた武器防具に、カナ美ちゃん達がデザインした衣服。

俺の糸を使って編まれた防刃性の高い軍手や、切れ味鋭いハサミなどの日用品。

基本的な商品はこんな感じだ。
値段はかなり手頃になっている。ここに来れば大抵欲しいものが揃う、というイメージを浸透させ、最初に常連客を掴みたい。

そして最終的には他所のお店を吸収し、大型ショッピングセンターへと事業拡大していこうと狙っている。

ともかく、これで店を始められる。

団員達との短い相談の結果、開店は三日後に決めた。

不安はあるが、取りあえずやってみて、駄目なら修正していけばいい。事業に失敗したとしても、傭兵業は続けるので喰えない事はない。

まずはイヤークラス経由で、開店日をお転婆姫に伝えておく。お転婆姫が動けば、貴族とかも客になってくれるだろう、という打算である。

第一王妃までついてきそうで不安だが、まあ、そんなに悪い事にはならないだろう、多分。

《百九十三日目》

今日は改築を親方達に任せ、《ソルチュード》達を率いて王都の外に出た。

二列縦隊を組み、一時間程離れた場所にある森まで駆け足で進んでいく。

革の軽装鎧を身につけ、手に剣や短槍などを持ち、食料や治療道具を入れた背囊バックパックを背負う重装備。以前の《ソルチュード》なら、ガキ大将などの一部を除いてすぐにヘトヘトになっていただろう。

だが食生活の改善と戦闘系の職業獲得、そしてエンチャントによって強化されたおかげで、何とか実戦に耐えられるようになっていた彼等は、一人の脱落者も出さずに到着できた。

一分だけ休憩してから四人一組を作り、森の表層部で夕方までモンスターを狩るよう命令し、送り出した。

五〇人なので十二組ができ、二人余る。なのでその二人——ガキ大将とガキ中將（女）は、オーロとアルジェントと組ませた。

そして、表層部にはそこまで高レベルのモンスターは居ないので、こいつらだけは更に奥で狩るように命令する。

オーロとアルジェントが居るので、“ハインドベア”級のモンスターが複数出ない限り大丈夫

だろう。イヤーカーフスもあるので、いつでも連絡もとれる。いざとなれば助けに入ればいい。俺は森の外でカナ美ちゃんと赤髪ショートと訓練しながら、全員が帰還するのを待つ事にした。

夕方となり、全員が帰還した。

多くの者が大小様々な怪我を負っていたが、既に懐かしくすらある“ホーンラビット”や“ヨロイタヌキ”を狩って来た者も居れば、オニグモの脚を数本もぎ取った所でウルフ系モンスターに横取りされた者、美味しいが近づくとも地下から根が伸びて突き刺してくる【刺根イチジク】を採取した者、吸いこむと眠くなる鱗分を撒き散らす“眠り蛾”を狩った者など、皆意外と頑張ったようだ。そして一番戦果が多かったのは、予想通りオーロ達の組だった。

無骨な斧を使う灰色の鱗が特徴的な“グレイリザード”、幻惑効果のある匂いを発して敵を惑わす大猫“ディアルックス”、豚頭に肥満体の“豚鬼”など、他を圧倒している。まあ、それくらいでないと困るのだが。

四人を褒め、頭を撫でた。くすぐったそうにしていたが、嫌ではないらしい。

それぞれの戦利品はアイテムボックスに収納してやり、骸骨百足に乗せて帰路についた。

大半はそこで寝たので、ゆっくりと走らせる。そして王都の屋敷に到着すると、まず全員を風呂に入れた。一日森の中で走り回ったおかげで、汗と血の臭いを強く漂わせていたからだ。

風呂を出た後は、各自が狩った獲物を材料にした飯を食わせる。より多く狩った者程、豪華な物になっているので、今後のやる気に繋がるだろう。

もつといい物を喰いたいなら、努力しろという事だ。

シンプルでいい。

《百九十四日目》

今日も改装は親方達に任せ、朝からカナ美ちゃんと連れ立って王都を出た。

脳内地図の穴埋めに分体は出向かせていたが、俺自身ではまだ行っていなかった迷宮都市《アクリアム》が目的地だ。

アクリアムは王都からも大森林からも離れた場所にあり、【魔帝】が治める《アタラクシア魔帝国》—— 今後は魔帝国とする —— との国境近くなのでまだ用心が必要な為、大森林育ちの団員達はまだ一人も行っていない。

そして到着したアクリアム。ここを紹介するには、まず【神代ダンジョン】の一つがある事に触れねばならないだろう。

今まで潜って来たような【派生ダンジョン】とは比べ物にならない程に難易度が高い【神代ダン

ジョン】が存在するとあって、今まで立ち寄った迷宮都市の中でも最も活気に満ちている。

【神代ダンジョン】から採取される特別なアイテム——【神迷遺産^{アーティファクト}】は、他のダンジョンアイテムよりも価値が高く、それを使用した独特の防具を身に纏った冒険者もチラホラ見受けられる。

難易度が高いので、挑む冒険者のレベルも相応に高い。中には【加護持ち】も交じっていて、結構美味そうなのが多かった。

話を【神代ダンジョン】に戻すが、ここのは【清水の亜神】によって造られたので【亜神級】に分類され、名は【清水の滝壺^{アクアム・フォール}】である。

ダンジョンの基本的な仕様の一つである地下階層型で、出現するモンスターはエレメンタル系や魚介系が主であり、トラップも水に関係するモノが多い。

最下層は五十階と、なかなか深い。そこまで潜り、ボスを殺した者は長い歴史の中でも極僅か、という話だ。

大抵の冒険者には特定の階層に鎮座する階層ボスすら殺せるだけの實力も無く、そういった者達は浅い階でアイテムを回収して日銭を稼いでいるそうだ。

ちなみにこれまではさら々と流してきた話なのだが、【神代ダンジョン】にもアイテム同様に等級^{ランク}というものがある。

最も難易度が高く、【勇者】や【英雄】達が挑んでも一階ではほぼ全滅するのが【大神級】。

これは世界に五つしか存在せず、僅かに残された情報によると、雑魚敵ですら亜竜などと同じレベルが基本となっているらしい。そして雑魚キャラゆえ、数を成して襲ってくるそうだ。

何それ怖い。

次いで難易度が高いのが、【神級】となる。これは【勇者】や【英雄】達なら何とか潜れるレベルらしい。それでも階層ボスで殺される事は多いそうで、油断はできない。

そして【神代ダンジョン】で最も楽なのが、ここのような【亜神級】となる。

一般人でも用心に用心を重ねれば何とか潜れるらしいが、それでも危険度は【派生ダンジョン】の比ではない。

高レベルの者でも油断すると容赦なく殺されるので、潜る者は限られる。

だが上手く行けば大金を掴めるとあって、命知らずは絶えないという。

露店や店で商品を物色しながら情報を集め、実際に迷宮にも入ってみたのだが、完全攻略するとなると本腰を入れる必要があるそうだ。

まずはお試しで一階を軽く回ってみたところ、長く幅広い通路はどこか神殿のような立派な内装でありつつ、床は踝^{くるぶし}まで浸かる程度に冷水が張っていた。このせいで歩くだけで体力を消耗するし、

体温も奪われていく。

それにダンジョンの効果によって通常よりも二段階強化されるダンジョンモンスター達はなかなか手強い。

が、その分美味かったので、もう少ししたら本格的に攻略しようと思った。

今回の戦果は――

水氷系統第三階梯魔術を使ってくる、丸く青い核に流水を纏わせたような“アイオライトエレメンタル”が二十三体。

小鬼程の大きさと、普段は床に擬態しているが、近づくとも鋼鉄よりも硬い殻で挟んで敵を切断しようとして飛び跳ねる“ハサミヨロイガイ”が一八体。

まるで水中であるかのように空中を泳ぎ、獲物を発見すると時速約一三〇キロで突進してくる、鉛のように重い三角錐状の頭部が特徴的な体長六〇センチ程の“ダンガンウオ”が四十七体。

硬化して金属鎧のようになった鱗殻を持ち、ハサミヨロイガイさえ噛み砕く強固な歯を持つ全長二メートル超の巨大魚“デイトロニス”が八体。

大型犬程の大きさの白い蛙に、魚の尾とヒレのような翼が生えたが如き外見の“ウォーター・リーパー”が一〇体。

――以上のような感じになっている。

この他にも様々なモンスターのドロップアイテムや迷宮産の素材を回収できたので、懐は温かくなった。実力さえあれば、【神代ダンジョン】はかなり良い稼ぎができる場所である事は間違いないだろう。

外に出ると、お土産となる魔法金属やらご当地食材やらを買い揃え、日が暮れる前に帰った。空を飛べるとあつという間に帰れるので、今後は航空機なども揃えたいものだ。

《百九十五日目》

今日は店の開店日。開店時間は朝九時からいだ。

だが、店の前にはすでにお転婆姫が待ち構え、ドヤ顔で『来てやったぞッ』などと言っている。雪が降る程寒い中、三時間も前から待つとか、正直アホかと。

高級な防寒具を着ているとはいえ、お転婆姫はまだ幼い。外に立たせたままでは、きつと風邪を引くだろう。

ちよつと呆れつつ、店舗の玄関近くに設置した小さな軽食コーナーに入れて、温かいお茶を出しておいた。